

My Favorite in Harp's song

ハープ 私の1曲

第10回 ハープ奏者 / 講師
梶田 希

『グリエール:即興曲』

いくら努力を重ねても、ままたまらないのが人と人との出会いである。思惑だけで世の中渡っていけるのなら、人はそうは悩まない。巡り合わせは、時として人生を一変させてしまう力があるだけに、始末に悪い。自分がどんなに「この人に会いたい」と念じて、大抵は実現しない。逆に思いもかけぬ出会いが発端で、人生が好転することもある。

梶田希は、ご本人曰く、一般家庭で育ち、特に音楽的環境に居たわけではなかった。幼少のころ、TVでハープの演奏を観て、母親にいつか私もやってみたくてと呟いたそうだが、本人ですら記憶にない。だが物静かな梶田の言葉を、母親は覚えていた。ある日、知り合いが習っている声楽の良い先生がいて、ハープもできるらしいから紹介しようかということになった。知らないというのは恐ろしい。果たして、この“先生”はヨセフ・モルナルだった。なるほど新しいパターンである。確かにモルナル氏は、ウィーン少年合唱団にかつて在籍し、声楽も教えることがあっただろうが、モルナルといえばハープ、しかも日本ハープの父である。かくして何も知らない梶田は、何の楽器もやったことがないのに、いきなりハープの最高峰に師事し、その後東京藝術大学付属高校から大学院までは、篠崎史子女史に師事した。よりによって、東西の名伯楽二人から薫陶を受けたのである。習いたいといっても、誰もが簡単に弟子になれるわけではない。梶田の幸運、引き寄せの凄さに感嘆するのもご理解頂けるだろう。

そんな彼女が、ハープをライフワークとする起点となった曲が、「グリエール:即興曲」だった。さほど有名ではないが、力強くビビッド

でいて哀愁もある、ドラマティックで短めの曲だ。もとは篠崎先生に勧められたのだが、曲の魅力をどうやったら聴き手に上手く伝えられるか、客観的な視点で最も考えた曲だというのが。一生懸命やっけてはいるけれど、どうも相手に伝わっていないのではないかという葛藤。誰もが知る曲を、期待通りに弾くことは違ったアプローチに戸惑ったらしい。自認して内向的というくらい、確かに言葉少ない彼女だが、演奏に接して分かったことがある。梶田の弾くハープからは、誠実さが伝わってくるということだ。加えて、普段の語り口とは違った饒舌さがハープから感じられる。そこで得心したのは、彼女の二人の師匠は、ハープそのものが彼女のコミュニケーションの手段であり、内面を開示できるツールであることを見抜いていたのではないだろうか。派手さはないが、その手段を淡々と努力によって磨いていた梶田の決意と本来の才能、そして性格の芯の強さを認めていたに違いない。グリエールの同曲の魅力は、単に座しているだけでは伝えることはできない。まして、幸運だけでは弾きこなせない。見事クリアして、この曲を突破口にした彼女は、コロナ禍収束後に、仲間や生徒たちと、再びハープによって語り合うことを心待ちにしている。



目指せ、「8.2ハープの日」! その1 ザ・ギース高佐のハープ奮闘記



前号でお伝えしたとおり、お笑いコンビ「ザ・ギース」の高佐一慈(たかさくにやす)が、今年の8月2日ハープの日で、久石譲作曲の「Summer」を弾けるようになる宣言をアナウンスしてしまったばかりに(?)、銀座十字屋で邊見美帆子講師の愛あるシゴキに耐えているという噂を聞いて見学にいった。高佐の潜在能力は誰もが認めるところ。

しかし、人前での演奏ってそんな簡単ではないし、すでに銀座十字屋側はとある企画も画策、ハシゴを外す気まんまんらしく(笑)、本人の練習も真剣そのものだった。今日のレッスンは、基本のきである指の構えから。

うーん、いけるのか?!波乱含みな状況に若干の不安を覚える記者であった…。次号報告を待て!

HARP LIFE

ハープと皆様を繋げる
オンリー・ハープなフリーペーパー

04

2021

Vol.16
Sixteenth
ISSUE

独占連載
夢はハープと共に
井上久美子
ライフ
ストーリー②

編集長インタビュー
「松岡みやび」

ハープ銘盤コレクション
「ヨセフ・モルナル
ハープリサイタル」

季節のおすすめハープ
Vol.16
DONEGAL



独占
連載手記

夢は ハープと共に

井上久美子ライフストーリー



KUMIKO 第2章 ジェノヴァ INOUE A life filled with harps

サルヴィ家の人々

1965年の夏、私はモルナール先生のご紹介で、その年の9月に行われるイスラエル国際コンクールへ行く前の3週間、イタリアのジェノヴァにあるサルヴィさんのお宅にご厄介になっていました。



▲ジェノヴァでの生活を支えてくれたヴィクトール・サルヴィー家

その頃のサルヴィさんの家はハープの工場とご自宅が一緒になっている、それはそれは大きな、16世紀に建てられたジェノヴァにあるヴィッラ・マリアと呼ばれる素晴らしい館でした。階下がハープ工場で、上階がご自宅。私はその上の階に住まわせていただきました。3週間ご家族と一緒に3食をともにしたことで、イタリアの文化や食事などたくさんのお話を学ぶことができました。特にサルヴィ家の食事は素晴らしく、私がイタリアンを大好きになった原点もこのジェノヴァのサルヴィ家なのです。朝は本当に軽く、お昼が毎日大変なご馳走で、それからお昼寝タイム。サルヴィさんの奥様は大変お料理上手でチャーミングな方でしたし、二人の

子供たちは可愛かったですが、非常におてんばで、やんちゃ盛りでもありました。特に男の子はともやんちゃでした。男の子の名前はマルコ。今のサルヴィ社の社長です。女の子の名前はジュリエッタ。サルヴィさんはよい耳を持っていらして、ハープもとてもお上手で、さらさらラヴェルの「序奏とアレグロ」を弾き、私の演奏に対して的確なアドバイスを下さり、そのことは今もよく覚えており、肝に銘じています。おいしいお食事をして、お昼寝をして、余った時間にハープを弾いていた気がします。時々、晩御飯がお終わったあとで、サルヴィさんは「さあこれから、映画に行こう!」。そのころ流行ったマカロニウエスタンを何回か見に行ったのを覚えています。とても楽しい生活で、今思うとコンクール前の暮らしでは全然ありませんでした。コンクールで惨めな思いをするのは当たり前ですね。コンクールがどんなものか全然分かっていませんでした。そのコンクールでは、自分が悪いのに大泣きをしたのを覚えています。

て、余った時間にハープを弾いていた気がします。時々、晩御飯がお終わったあとで、サルヴィさんは「さあこれから、映画に行こう!」。そのころ流行ったマカロニウエスタンを何回か見に行ったのを覚えています。とても楽しい生活で、今思うとコンクール前の暮らしでは全然ありませんでした。コンクールで惨めな思いをするのは当たり前ですね。コンクールがどんなものか全然分かっていませんでした。そのコンクールでは、自分が悪いのに大泣きをしたのを覚えています。

運命を変えた イスラエルでのコンクール

私のイスラエルのコンクールでの入賞は、その次の回(1970年)のことでした。イスラエルに行くのに、このときもまた船旅でしたが、暗くて揺れる日本海ではなく、明るい、穏やかなで真っ青な海と空の美しい地中海航路でした。その行きの船で出会ったのが、それ以来50年以上にわたる友達となったシャンタル・マチュー。彼女は、やはり次のイスラエルで優勝しました。その時の3位は篠崎史子さんです。その船にはコンクール受験者が何人も乗っていました。その時のコンクールと次のコンクールで出会った多くのハーピストが、その後世界各地で活躍しています。みんな、今も私の大事な仲間たちです。そして、私の人生で一番の素晴らしい出会いは、そのときイスラエルのコンクールの審査員でいらした私の生涯の恩師、オランダの名教師、フィア・ベルクハウト先生でした。コンクールの後で「オランダにいらっしゃい!」とおっしゃっていただいたときは、まさに夢のような気分でした。

こうしてこのイスラエルで、私は師事する先生が見つかり、行き先も決まったのです。歴史にも人生にも「もしも」はありませんが、私がイスラエルのコンクールに参加しなければ、このような出会いはなかったし、私の人生も全く違うものになっていたことでしょう。横浜から出港して2か月で私の進むべき道が大きく開けたのです。

(次号へ続く)



▲1965年イスラエルにて。中央が井上久美子、ロバにまたがるシャンタル・マチュー、その右にミシェル・カトリーヌ、元読響ハーピスト渡辺万里

●筆者略歴：東京藝術大学大学院在学中にオランダ政府の奨学金を得て留学。以後、世界各国で演奏、コンクールの審査員、指導を行う。現在、世界ハープ協会コーポレーション・メンバー、武蔵野音楽大学特任教授、日本ハープ協会副会長。



▲浴衣姿のマルコ(左)とジュリエッタ



▲同年イスラエルに集結した日本人ハーピストたち。左から井上久美子、チェスキーナ洋子、渡辺万里、米山日出子



◀後に生涯の恩師となるベルクハウト女史

Miyabi Matsuoka

編集長インタビュー：松岡みやび

話題のミヤビ・メソッドに迫る

気になっていた。派手な広告を打っているわけでもないのに、そこかしこで「ミヤビ・メソッド」なる言葉が、聞こえてくるようになっていたからだ。経験上、本当に良いものはメディアの意図とは別に口伝で勝手に伝わる。たぶん、独特なハーブ習得法なのだろうが、ここまでボトムアップで評判が聞こえてくるということは、その恩恵に浴している方が多いという証左なのではないか。一方で、その習得法は、決して芳しいものではないという声も聞こえてくる。どっちなんだ？こういう時には本人の話を聞いてみるほうが早い。かくて、取材の機会が到来した。

遠心力と梃子の原理と

松岡みやびに対し、柔和で素直なひと、それが会った第一印象だった。オリジナルのメソッドを確立し、自分の名前を冠して売り出したバリバリのやり手…業界筋の彼女の見立ては、そんなところではないだろうか。

「NHKの番組に出演した際、プロデューサーさんから、指にマメができない奏法に、みやびさんの名前を付けるべきだと云われたのがきっかけで、その後に教本発刊のオファーが来たというのが、経緯だったのです」。

教則本「はじめてのハーブ教本」は、5千冊売れ、第8版を重ねた。海外でも生徒数が増えている。驚異的である。「ハーブはあれだけの弦を手繰るのだから、マメはできて当たり前」という風潮に際し、指が痛くならずマメもできないとなれば、耳目をひくのは当然だろう。それほどの説得力に満ちているのはなぜか。彼女は、自分の経験則を体系化しているので、自説に全くブレがないのである。むしろマメができないのは、当初自分は特異体質なのだろうと思っていたのだという。

「中学1年からハーブを始めて以来、指にマメを作ったことがないのです。ところが教室を始めたら、生徒にもできない。実はそこから何か秘訣があるのではと考えたのです。専門家に分析頂いたら、遠心力と梃子の原理を使っていたということが判ったのです」。

通常は、フォームを固め、指を鉤のようにして指の関節で弦を弾く。ところが、松岡の指はむしろ反り返っており、肩から腕を回してまるでハンマー投げの応用かのように、非力で音も遠くに飛ぶ弾き方をするので、音を出していた。機会があれば松岡の動画を観て頂きたいが、弦に向かって手がまるで蝶が舞い降りるように上から降りてくる。あれは伊達ではない。実は本人も知らぬ間に身に着けていた理に適う奏法であり、体に負担をかけない方法を、後追いで自ら原因を突き止めて編み出した。それがミヤビ・メソッド誕生の原点なのだ。詳細は本に譲るが、対話中につき松岡にも呟いてしまった。「みやびさん、そりゃ敵も作りますよ」と。なぜなら、このメソッドはのっけから、先達たちの説いてきた方法論とはある意味で真逆だからだ。

持論を支える絶え間ない研究

現況、ハーブの愛好家の裾野がなかなか広がらない理由のひとつとして、松岡は語る。

「指が痛い。これで、せっかくハーブを始めてもやめてしまう例も多いのです。プロになるのなら話は別ですが、楽しみでハーブを演奏したい人たちの芽も摘んでしまう…」

彼女自身も、東京藝術大学を出て、日本ハーブコンクールのアドバンス部門の最年少優勝を皮切りに、世界の重賞を手中にしてきた演奏家だが、東京大学教養学部も出て、心理学も学び、ハーブのもうひとつの特性といえる「癒し」をカウンセリングと結びつける活動でも成果を上げている。否応なく「出る杭」になってしまうから、むしろ謙虚に自助としての学術的裏打ちを固め、さらに体験を加味して、日々の研鑽から惜しげもなく技を伝播し、仲間を増やそうと努めている。人気には何の不思議もないと思う。彼女が、「ユーザー自身が習得法を選べる時代」を提唱した意義は大きい。最後に分かったこと。それは松岡のブログにもあるが、「21世紀は一家に一台ハーブの時代に」という言葉、これこそが彼女の究極の目標であり、偽らざる本音なのだということである。

21世紀は一家に一台
ハーブの時代に。



●演奏家、講師、カウンセラーなど、習得後のキャリアパスを豊富に考慮されているのも、ミヤビ・メソッドの魅力のひとつ。

Point of
PERFORMANCE

演奏のポイント

今回は、右手と左手のアルペジオの練習です。音の大きさを揃えるようにするとリズムも安定します。「荒城の月」はソプラノ・リコーダーとのデュオですが、弾き歌いでもどうぞ。メロディにマッチするよう、アルペジオの幅を自由に変えて、変化を楽しみましょう。

右手のアルペジオ

<52>

<53>

左手のアルペジオ

<54>

<55>

KOJI
AMADA
Collection
vol.12

荒城の月

滝 廉太郎
大柿かおる 編曲

Recorder (Sop.)
Harp

a tempo

Harp Life CD Collection

ハープライフ選定 ハープ銘盤コレクション

時を超えて、いつまでも残しておきたい、
ハープの銘盤CDをご紹介してゆく
コーナーです。



Harp Life
GOLD DISC
第6回

「ヨセフ・モルナール / ハープリサイタル」

かつて「怪談」を著し、日本民芸運動の祖となったのは、外国人で後に日本へ帰化する小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)だった。日本では、海外の渡来人によって文化を拓かれて開花させてきた伝統もある。ハープの世界でいえば、その役目を担ったのが、ヨセフ・モルナールであった。

ウィーン少年合唱団を経て、ウィーン音楽アカデミーで学び、ウィーンフィルのハープ奏者だった1952年にN響の招きで来日。彼を通じて、日本はハープに魅せられ、モルナール本人も不思議の国・日本に定住し、今まで琴が主流であった日本へ堅琴=ハープを伝播した。「日本ハープの父」と云われるが、その命名はけっして大袈裟ではない。そのモルナールが、三十代後半というまさに演奏者としては脂の乗り始める全盛期に、キングレコードが収録していた音源をまとめて一枚にしたのが本作である。これを銘盤蒐集と呼ばずして、何と呼べばよいのだろうか。

不幸なことに、こうした名演がお蔵入りする背景には、未だハープが黎明期であり、一般にハープは珍しいというよりは奇異な目で見られている時期であり、当時のフルート名手・吉田雅夫との録音という名分をもってしても、大量のリリースには至らなかったというのが正直なところだろう。本作の一部は、

アナログ盤で出てはいたが、リイッシューに当たって、吉田の弟子で後に高名を博した故・林リ子との「春の海」のデュエットという余録を施したのが嬉しい。この発掘こそが、一番の収穫だ。前出の八雲ではないが、海外からその技や光の当て方を持ち込んだ粹人たちの共通項とは、日本の文化を愛し、わが国のメンターになるだけではなく、自らも日本文化を吸収し、海外へも発信したことにある。

また、選曲からもわかるように、かなり硬派でシリアスなラインアップであり、「どうせ日本人には、分かりはしないだろう」という甘さは微塵もない。全編自分のベストを残そうという気概に溢れている。そう、この盤は、まさにモルナールが自分の天命を日本という異国に見出し、世界へ偉大な足跡の第一歩を記した貴重なドキュメントなのである。

お買い
求めは、
こちらから!



季節の おすすめハープ

Vol.16

季節ごとに、毎号1台ずつ
銀座十字屋がおすすめする、
素敵なサルヴィハープ。
今回は「ドネガル」です。

ユニークな
スタンダードとなった、
サルヴィの自信作。

今回ご紹介するのは、ドネガルです。この楽器は、実にユニークなハープです。特殊なフィーリングや個性的な響きで、製造元であるサルヴィですら「ケルト音楽愛好家に推奨」としているのに、常にレバーハープ人気では不動の上位を譲らない。ケルト・マニアがそこまで多いとは思えませんし、同じ系統でさらに軽くなった後発のUNAに、そろそろその座を明け渡してもよさそうなのに、ドネガル・ユーザーは歴然と多く存在する。理由は推測ですが、おそらくサルヴィの楽器作りの土壌と原初的ポリシーが、まさに体现されているハープだからではないでしょうか。

そもそも「イタリアなのに、なぜアイリッシュハープ?」と首を傾げたくもなりますが、実はそこには深い歴史があります。イタリアの山岳地帯を有する現在のサルヴィの本拠は、古代ではケルト人の居住地でした。その後、古代ローマ帝国に侵略され、イタリアの地となります。つまり、ケルト音楽を愛好する土壌はすでにイタリアにはあったということです。サルヴィは、その伝統を復活させたに過ぎません。ただし、同社の温故知新のようなポリシーは、「常に伝統は重んじながらも、時代に即した工夫や意匠を吹き込む」という心意気に満ちています。ドネガルは、まさにそういう要素がぴったりとフィットした資質を備え、実によりタイミングで登場して、一気に名声を博したといえます。

ケルト特有の弾き語り文化を活かすとなれば、サルヴィなら室外での演奏や合奏なども考慮し、ポータビリティに優れ、豊かな音量とサスティーンの効いた音に仕上げます。そのためには、狂いの少ない高性能のレバーを装着し、低張力でバランスの取れた独自のカーボンファイバー弦を採用します。その結果として、非力でもよく鳴るクリスタルで温かなサウンドと、プロ仕様ながらも扱いやすい、ケルト以外の音楽も許容するバランスの取れたレバーハープが生まれたというのが、ドネガル誕生の経緯だったのではと考えます。

響板には、フィエンメ谷産レッド・スプルースを使用。マホガニー、ウォルナット、ナチュラルのカラバリ。ユニークなスタンダードとなったサルヴィの自信作です。



Donegal

ドネガル